様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００３７２

研究課題名（和文）装飾農園の変容にみるイギリス農業コミュニティの発展と継承

研究課題名（英文）The Development and Succession of British Farming Communities in the Transformation of Ferme Orne

研究代表者
今村　隆男（Imamura, Takao）

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：９０１９３６８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、イギリスの庭園および農業史に関わる一つの具体的事例として「装飾農園」を取り上げて文献資料を中心に考察した。その結果、この農園の一形態は「有用性」と「美」の両立を追求する場として18世紀に創造されたこと、農業・産業革命の後の近代化の中でその両立は不可能になって、より「有用性」を尊重するが美的要素を残す「模範農園」などの形態に変貌していったこと、一方でnational identityとしての理想の田園風景のイメージの形成に貢献したこと、などを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで装飾農園は、イギリスの庭園の典型例とされる風景式庭園の周縁的な一形態とみなされ、国内・国外ともに研究が殆ど行われてこなかった研究対象である。本研究は、この装飾農園の誕生・発展・継承の過程を農業革命を中心にした時代背景の変化をもとに分析した上でその意義を整理することで、文化論（表象や文学など）や農業史といった研究領域を融合する学際的な成果を上げることができた。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the " Ferme Ornee" as one specific case study in the history of gardens and agriculture in Britain, and examines it with a focus on literary sources. It reveals that this form of farm was created in the 18th century as a place to pursue both " usefulness" and "beauty," that their compatibility became impossible during modernization after the agricultural and industrial revolutions, and that it was transformed into "model farms" that respected "usefulness" more but retained aesthetic elements, while it contributed to the formation of the image of the ideal rural landscape as a national identity.

研究分野：イギリス文学、イギリス文化

キーワード：イギリス文化　装飾農園　農業コミュニティ　イギリスらしさ　田園風景　ピクチャレスク　農業革命

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「装飾農園(ferme ornée)」という名称は、以前の科研研究の中で調べた「装飾コテージ(cottage ornée)」と似ているが、「装飾」の意味が大きい後者とは異なり、前者はコミュニティの問題や主観産業である農業と深く関わっているという点でイギリスの近代における社会文化的意義は大きいがゆえに、関心を持つことになった。基礎知識に関する調査の結果、近代における農をめぐる理想追求の原点として、また同時代の多岐にわたる問題域―装飾的な風景庭園、その所有者による農地管理、産業・農業革命、ユートピア思想、等々―の一つの結節点として、装飾農園は重要な研究テーマとなりうると考えたことが本研究の出発点である。

装飾農園とは 18 世紀半ばに大地主である富裕層が領地に造ったもので、その名の示す通り装飾性を重視した農園の一形態である。装飾農園の最大の意義は、農業を基盤としたコミュニティの理想を目指す動きの原点として位置づけることができることである。その発生の段階において装飾農園は牧歌の世界の再現を意図しているという点を除けば風景式庭園と多くの共通点を持つものだったが、19 世紀以降は庭園としてよりも農場としての要素を強め、主として「模範農園(Model Farm)」という形に姿を変えて発展していった。

本研究ではこれまで殆ど注目されてこなかったこの装飾農園を取り上げ、その実態と成立過程を明らかにした上で、農業の改革期であったロマン派の時代に消滅したこと、それにもかかわらず装飾農園が有していた理想は 19 世紀にはいってからも時代の要請に適合する形で継承されていったことを明らかにしようと計画した。

２．研究の目的

(1)

本研究は、具体的事例として 18 世紀のイギリスで風景庭園の一つの形態として誕生した「装飾農園」などの農園形態を取り上げ、自然発生的な農村ではなく人為的に造られた農業コミュニティが、どのように 18 世紀のイギリスにおいて発生し、農業の近代化の流れの中で変容しつつ、19 世紀以降の地域の理想郷造りに発展していったのか、さらに現代の地域共同体や農園事情にどのよう受け継がれていったのか、という問題を明らかにするものである。これまで「装飾農園」は殆ど研究が行われていないばかりか、その定義すら定かではなかった。さらに、19 世紀の「模範農園」など計画的独立農園との継続性も問題にはされてこなかったゆえに、その詳細を明らかにするだけでも研究としての意義は大きい。農業史や庭園論、工場労働者のためのユートピア史、national identity の形成史、などといった隣接分野の研究は多いが、これらの諸分野の結節点として「装飾農園」は注目する価値がある。

(2)

「装飾農園」が誕生しそして発展していった時期、すなわち 1730 年ごろから 18 世紀後半は、農業革命や産業革命の時期と重なっている。それ以降、19 世紀にはいってイギリスの主要産業は農業から工業や商業に移っていった。近代化の過程で農業がイギリスの産業の周縁に置かれていく中で、生産性や経済性を至上とする価値観への反動も含めて、地域コミュニティや農業への期待、あるいはそれらの抱える課題をめぐってどのような議論が行われ、そしてそれに基づいてどのような実践が行われていったのかを明らかにすることが目的である。農業の発展やその意義の変化を考察することは、我が国における農業の意義を考える上でも極めて示唆的であるが、その手がかりとなるものは意外と多くはない。その中の貴重な例が、イギリスにおいては「装飾農園」であると考えられる。イギリスは世界で初めて産業革命を起こし推進した国であるが、「世界の工場」とまで言われるようになったこの国において、一方で農業はどのような位置におかれていたのか、どのような意義を持つに至ったのかを考えることは、イギリス近代の理解にもつながっている。

３．研究の方法

18-19 世紀の農業や庭園、理想郷などに関わる文献の中に現れた関連言説を検証することを研究の手法とし、「装飾農園」そのものの実体や、それが農業を基盤とする地域コミュニティの発達に及ぼした影響について究明した。研究の手法としては学際的なアプローチを取るが、基本的には農業や庭園、文学、美学、地域共同体などに関連する諸文献の読解を柱とした。現地調査なども視野には入れるが、庭園同様に農園は同じ姿でとどまっていることは稀である上、計画や理論のみで実質的に実現しなかった例もあるため、多岐にわたる分野の文献資料が研究対象の中心になった。なお、本研究では、コロナ禍の中で２回目の渡英ができなくなり、現地調査を十分

に行うことができなかったことを付記しておく。

４．研究成果

(1)「装飾農園」の誕生と継承

庭園の中に農業の要素を持ち込もうという発想が初めて認められるのは、1712 年の『スペクテイター』におけるアディソンの主張の中である。アディソンはここで庭園における「楽しみ」と「収益」の共存という理想を語っているが、これは風景における「美と有用性」の融合という 18 世紀を通して議論されたテーマに対応するものである。18 世紀前半という産業革命以前の時代においては、「収益」は主幹産業である農業に直結していた。アディソンが『スペクテイター』で具体的に言及しているのは「牧草地」や「麦畑」、「生垣の列」などで、農地に「少しの人為(Art)」を加えるだけで領地は理想化できると言う。この主張が、まもなく農地を庭園内に組み込んだ装飾農園を生むことになった。

「装飾農園」という言葉を最初に使ったのは Switzer の庭園論(1742)であり、ほぼ同じ時期に最初の「装飾農園」と名乗るウーバーン(Wooburn または Woburn Farm)やレゾッズ（Leasowes）が造園されている。この時代の文学において牧歌や農耕詩が流行したことや、ウーバーンなどは全体が牧場的要素を持った庭園であることから、造園の支柱となっていたのが伝統的なパストラル思想であったことが読み取れる。「装飾農園」の思想史におけるパストラル思想の役割や、庭園としての美観と実際的な生産性という相容れない要素の調停がどのように計られたのかは、こののち装飾農園がどのように発展・継承されていったのかを考える上で重要な問題点である。

(2) 典型的な装飾農園ウーバーン

「装飾農園」の最初の典型的実例として挙げられるのは、サウスコートが 1734-35 年に造園したウーバーンである。レゾッズは庭園的な要素が強く、本研究にはウーバーンの分析が肝要であると判断した。ウーバーンは詳細な記録が残っている稀な装飾農園の例でもあり、1770 年に出版されたウェイトリーの『現代造園論』と、1760 年代に二度そこを訪れたパーネルの個人的な旅行記の中に記されている。ウェイトリーは、装飾農園を「田舎のあらゆる環境を庭園の境界の中に持ち込む方法」だとし、ウーバーンほどその完璧な例は無いとして具体的にこの庭園の様子を詳述している。それによれば、ウーバーンは丘の斜面に造られた面積約 150 エーカーの庭園で、そのうちおおよそ半分は牧草地、残りは庭園と耕作地が 4 分の 1 ずつで、耕作地を構成するのは主に麦畑である。この「庭園」とは遊歩道とその周囲のことで、この遊歩道は花々や灌木などの植物が豊富に植えられ、牧草地と麦畑などを取り囲んでいる。「種まきどきから収穫どきまで」麦畑では「田園の仕事」が行われるとされていることから、園内の農地では実際に農民たちが作業に勤しんでいることが読み取れ、ここでは農園と庭園が融合していたことは明らかである。ウェイトリーが特に注目しているのは遊歩道に並行する「分厚く高い生垣」で、高さ８フィートほどの生垣の列にはスイカズラやジャスミンといった芳香性の高い蔓性植物が絡まっており、生垣に面した芝地は樅を始めとする大小の多様な木々や花壇で飾られている。

周囲を芳香で満たすスイカズラなどが絡まった生垣の様子は 18 世紀の詩人 W. クーパーやピクチャレスクの理論家 U. プライスらによって描かれており、この風景は W.コベットら 19 世紀の田園描写を経て 20 世紀の H.G.ウェルズの小説などにまで引き継がれてゆく、伝統的な理想の田園風景の構成要素の定型である。つまり、ウェイトリーの記録はこの生垣のイメージが装飾農園に始まるものであることを示唆している。またウェイトリーは牛や羊の鳴き声や首にかけられたベルの心地よい音について言及し、この庭園が視覚・嗅覚・聴覚を使って楽しめるようにデザインされていることを伝えている。このことは、農地や農業との接し方が 19 世紀以降にどのように発展していったのかを知る手がかりともなる。

園内から外部を見渡す際の風景も注目に値する。丘の上から見晴らせるのは「農場や田園邸宅、村々」あるいは教会の尖塔などで、ウォルトン橋はこの庭園の装飾として園外に造られたかのようだとされる。つまり、この装飾農園内からは周囲の農地が見渡せるよう意図されていたのであり、ウェイトリーの説明はウーバーンがまさに外部の「環境」すなわち農地を園内に取り込むべくデザインされていたことを物語る。この装飾農園は、イギリスの田園風景を映し出す、まさに鏡だった。丘の頂からの眺望についてのウェイトリーの描写は、日本の借景に類似した技術がウーバーンにも導入されていたことを伝えている。

(3) 生垣・農地・農業の変化

ウーバーンに始まる装飾農園の変化のプロセスを考察するには、イギリスにおける同時代の農業史を検証することが不可欠である。農業史に関わる文献をもとに農業革命前後のイギリスの田園風景の変容を外観すると、ノーフォーク農法が始まって農業革命に繋がっていったのはウーバーンが造園された 1730 年代で、その後、議会制囲い込みが増え始めるのがウェイトリーが『現代造園論』を出した 1770 年ごろからである。議会制囲い込みの数は 1770 年を境に急増

し、80 年代の揺れ戻しのあと 90 年から再び急増に転じ、ナポレオン戦争のあった 19 世紀の最初の 15 年間にピークを迎える。1770 年までというのは、ワーズワスがのちに『湖水地方案内』になる 1810 年執筆の『選り抜きの光景』の中で「羊飼いと農民の理想の共和国」が存在したと主張している時期で、詩人の歴史判断は時代区分に関してはおおむね正しいと言える。

囲い込みを中心にした農業革命によってイギリスの田園風景は相当程度変化したものと考えられるが、その指標となるものの一つは農地を区分していた生垣である。生垣の変化を知る物差しとして考案されたのがフーバーの法則である。フーバーは、第二次囲い込みまでの生垣とそれ以降の生垣の区別を、古い生垣は曲がりくねっていて厚みがあり、含まれる樹木の種類が多い、それに対して、新しい生垣は直線的で薄っぺらであり、樹種はサンザシだけであることが多い、と考えた。あくまでもこれは目安であるが、いずれにせよ議会制の第二次囲い込みによってイギリスの田園風景はかなり変化したことは容易に想像がつく。

ウーバーンをはじめとする初期の装飾農園が造り出したのは、農業革命以前の vernacular な田園風景の理想像だった。そのあと、1790 年代になると産業革命の進行と共にフランス革命が始まり、農業大国フランスとの対立が国内の食料需要に応えることを急務とし、それに応じてイギリスの農業革命は佳境に入り、ウーバーンの装飾性は時代遅れとなる。その糧で、装飾農園は農業の近代化を取り込みつつ、通常の農場に近い形に変貌していった。この時期は、当然ながら装飾農園全体の衰退期になる。

19 世紀の田園風景描写の例として注目したいのは、ナポレオン戦争後に国内の中南部各地を馬で巡って詳細に観察したコベットの紀行文『乗馬紀行(Rural Rides)』である。そこでもスイカズラや野バラで飾られた生垣やその周囲の小麦畑の描写などは賞賛されており、これはウェイトリーやパーネルが記したウーバーンの風景と殆ど変わるところがない。コベットがこれを書いた 1820 年代には囲い込みはほぼ終了していたが、ウーバーンと同様の「スイカズラの絡まる生垣」すなわち囲い込み以前の古いタイプの生垣の描写がここにも認められるということは、実際の風景の変化にも関わらず、農地風景をめぐる理想は世紀が変わっても変化しておらず、装飾農園は 19 世紀の農園の理想像の形成に貢献していたことを物語っている。

(4) 18 世紀末以降における装飾農園の衰退と「模範農園」の誕生

現実の農業社会では、農業革命が進展する中で、クラッブやワーズワスによる「アンチ・パストラル」と呼ばれる詩が示しているように、装飾農園の基盤にあった牧歌的・農耕詩的世界観は現実離れしたものになってゆき、美と収益の両立の維持は徐々に難しくなっていった。この時代にはヤングやマーシャルといった農業の実務家による技術改革も進み始め、その中で装飾農園は衰退してゆき、それに代わって「模範農園」と呼ばれる、本格的な農業経営を目指す農園形態が登場してくる。そして、ビクトリア時代になると装飾農園は過去のものとなり、農園はひたすら効率化、機械化、科学化の道を歩む。このような変化の中でウーバーンが 19 世紀にまで農園として生き残ったのは、1790 年代にサモンらの農業顧問を招いて農作業に水力や蒸気、風力による機械を導入して農業の効率化・機械化を進めたからである。イギリス版の牧歌や農耕詩と呼べるジャンルが衰退したのと同時期に装飾農園も姿を消したと言うことになる。

しかし、「装飾農園」が掲げた農業コミュニティの理想の精神は受け継がれていったと考えられる。19 世紀に実際に造られた理想郷は Owen の New Lanark など、工業を軸に構想された事例が多く、一方で数は少ないが Ruskin の St. George's Guild Farm など農業を軸とした理想的計画コミュニティも見いだせる。しかし、後者のような農業コミュニティの建設は計画だけに終わるか成功しなかったものが多く、「装飾農園」は結局のところ、庭園ではなくまた理想郷でもなく、生産性を有する農園として農業の近代化を取り込みつつ発展的に解消し、模範農園に取って代わられて行ったと考えられる。その有用性における継承者はなかったが、「装飾農園」が残したものもある。それは、農業を軸とした共同体の理想の追求ではなく、田園の理想風景のイメージへの貢献だったと言えるだろう。このイメージは、「イギリスらしさ」の象徴としての田園風景の構築に関与したと考えられる。

(5) アメリカ、そして現代における装飾農園の継承

イギリスを訪れたアメリカの農業関係者の記述からは、装飾農園から始まるイギリスの田園の理想風景が 19 世紀には海外にも輸出されたことがわかる。19 世紀の半ばになると、農業理論家 A. J.ダウニングは装飾農園を「風景庭園の美と農場の有用性とを結びつける美しい様式」としてアメリカに紹介している。また、ダウニングと共にニューヨークのセントラル・パークを手がけたオルムステッドは、1850 年に農園のモデルを求めてイギリスに渡った際、残っていた装飾農園のいくつかを訪れている。イギリスの田園の美しさに感動した彼が特に注目して書き記したのも、5 月の花咲く生垣の風景であり、外国人であるオルムステッドの目には、生垣の風景は「イギリスらしさ」の象徴として映ったことがわかる。オルムステッドはその後ボストン郊外のモレイン農園(Moraine Farm)の造園を委託されている。彼はその土地の土壌や気候を考慮し、動植物の改良、肥料や土地のローテーションの方法の開発などを試みており、そこでは科学的知識が植生を豊かにしているだけではなく、装飾農園風の馬車道が円形の周回道路をなし、その道沿いの生垣は視線を牧場沿いに誘って農場を「映画のような」美的風景に変えていたとされる。

つまり、モレイン農園は新しい科学に支えられた生産性と、イギリスの田園を手本とした風景美を融合させた、新しい装飾農園だった。このように、イギリスの装飾農園はより発展した形でアメリカに受け継がれていった。

農業史の研究家であるリックウォーらは、イギリスを含む近現代の農園の様々な進化を紹介しているが、その中には味覚を通して自然に触れることを意図したレストランを併設した例や、カエルや小鳥の鳴き声をサウンドスケープとして利用した例など数多くの農場が挙げられている。彼女らは、五感を使っての体験を通して自然と交わることが精神的癒しを与えてくれるという役割を農園に求め、その起源をウーバーンに見出している。18 世紀の末になるとロマン派の詩人達は「五感」を通して自然と接するべきことを盛んに奨励するようになるが、園内の動植物と多様な感覚を通して交流することはのちの農園がウーバーンから学んだことだった。近代に入ると風景美や自然美は視覚だけで楽しむものではなくなっていった。イギリスの 18 世紀に誕生した装飾農園は、世界中の多くの現代農園において多様な形で足跡を残していると言える。

(6) 装飾農園が残したもの

以上で本研究成果の要点はまとめられたが、その他に装飾農園が遺したものを挙げておきたい。ウェイトリーがウーバーンの花壇の多彩な植物の中で注目して具体的に名前を挙げている花の多くはイギリスの田園のどこにでも見られる自生種であり、野生のバラやリンゴ、スイカズラといったイギリスの野原に一般的な植物がそのまま持ち込まれていることがわかる。オルムステッドはその方針をさらに発展させ、モラインの特殊な土壌に適合した地域の植物を園内に植えることでピクチャレスクな風景を作り上げようとした。その土地の気候や土壌に適合した植物が美しいという考え方は、ロマン派の詩人ワーズワスにも見出せる。例えば彼は 1810 年に書いたイギリス北部の湖水地方の案内書（『選り抜きの光景』）の中で、成長が早くすぐに収益に繋がるという理由で大量に植林されていた外来種の落葉松の美観を否定し、地域の自生種の中で最も美しいと樺の木を賛美している。これは風景美とは何かという問いかけに対する先見的な答えとなっているが、装飾農園の庭園部分はその方向性の先駆けである。

また、園内の動植物と多様な感覚を通して交流することはのちの農園がウーバーンから学んだことであるが、その自然は四季を通して変化し、また動植物は時間の経過の中で成長することを装飾農園の主達は意識している。これと関わるが、ウーバーンにおいては「種まきどきから収穫どきまで」の労働に接する喜びにウェイトリーは言及していた。四季の巡りの中での農業労働の価値が評価されているということになるが、労働の価値を体験する場としての農場という考え方も現代に引き継がれた装飾農園の遺産だと言える。

参考文献

Addison, Joseph, et al., *The Spectator*. ed G. Gregory Smith. 4 vols. Tronto, 1930.
Andrews, Malcolm. *A Sweet View: The Making of an English Idyll*. Reaktion Books, 2021.
Cobbett, William. *Rural Rides*. Delphine Lettau and the Online Distributed Proofreading Team. 2010. Web. 18 Oct. 2022.
Cowper, William. *The Poems of William Cowper*, edited by John D. Baird and Charles Ryskamp, 3 vols, Clarendon Press, 1980-95.
Downing, Andrew J. *A Treatise on the Theory and Practice of Landscape Gardening*. London and New York: Wiley and Putnam, 1841.
King, R. W. “″Ferme Ornée″: Philip Southcote and Wooburn Farm.” *Garden History*. 2.3. (1974): 27-60.
Knight, Richard Payne. *The Landscape, a Didactic Poem*. 2nd ed. London: W. Bulmer, 1795.
Lickwar, Phoebe, and Roxi Thoren. *Farmscape: the Design of Productive Landscape*. London and New York: Routledge, 2020.
Martins, Susanna Wade. *The English Model Farm: Building the Agricultural Ideal, 1700-1914*. Oxford: Oxbow Books, 2002.
Olmstead, Frederick Law. *Walks and Talks of an American Farmer in England*. New York: G. P. Putnam, 1852.
Rackham, Oliver. *The History of the Countryside: the Classic History of Britain's Landscape, Flora and Fauna*. J.M. Dent, 1986.
Sambrook, James. “Wooburn Farm in the 1760’s” *Garden History*. 7.2 (1979): 82-101.
Sayre, Laura B. “Locating the Georgic: from the Ferme Ornée to the Model Farm.” *Studies in the History of Gardens & Designed Landscapes*. 22.2 (2002): 167-92.
Wells, H. G. *The History of Mr. Polly*. Edited by Simon J. James, Penguin Books, 2005.
Whately, Thomas. *Observations on Modern Gardening, Illustrated by Descriptions*. London: T. Payne, 1770.
Wordsworth, William. “Introduction.” *Select Views in Cumberland, Westmoreland, and Lancashire*. London: R. Ackermann, 1810.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 今村隆男	４．巻 73
２．論文標題 ウーバーン(Wooburn)の風景とその遺産	５．発行年 2023年
３．雑誌名 和歌山大学教育学部紀要（人文科学）	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 今村隆男	４．巻 70
２．論文標題 ポール・サンドゥビーの二つの風景	５．発行年 2020年
３．雑誌名 和歌山大学教育学部紀要（人文科学）	６．最初と最後の頁 13-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 今村隆男	４．巻 69
２．論文標題 プロー『田園建築』と『装飾農園』：庭園と農業の関係をめぐって	５．発行年 2019年
３．雑誌名 和歌山大学教育学部紀要（人文科学）	６．最初と最後の頁 7-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19002/AN00257999.69.7	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 今村隆男
２．発表標題 「装飾農園」の継承とロマン派
３．学会等名 日本英文学会中国四国支部大会（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 今村隆男	４．発行年 2021年
２．出版社 音羽書房鶴見書店	５．総ページ数 486
３．書名 ピクチャレスクとイギリス近代	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関